

第 8 号

1994年12月

社會經濟史學會中國四國部會

會 報

(発行)

会報編集委員会

岡山大学経済学部内  
岡山市津島中3-1

第8号

## 1. 事務局体制の

### 変更について

昨年度の大会において、事務局を従来の広島（広島大学経済学部）から岡山（岡山大学経済学部）に移転することを決定し、移転しました。これにともない事務局体制も変更しました。

代表理事 神立春樹

理事 松尾 寿（島根）、下野克己・

森元辰昭（岡山）、小川国治・道重哲男・

加藤房雄（広島）、及川 順（山口）、

伊丹正博（香川）、三好昭一郎（徳島）、

平田桂一（愛媛）、関田英里（高知）、

<未定>（鳥取）

監事 辻岡正己

幹事 井上 洋・千田武志・安蘇幹夫

顧問 内藤正中・比嘉清松・奥田秋夫・

渡辺則文・高橋 衛

事務局 森元辰昭（事務局長）・在間宣久

社会経済史学会理事 岩橋 勝・神立春樹

事務局 〒700 岡山市津島中3丁目1番地

岡山大学経済学部（神立春樹研究室）

電話 086-252-1111（代表）内線7535

直通 086-251-7535

FAX. 086-253-1449（経済学部事務部

人事係室に設置）

郵便振替口座番号 01290-4-12846

加入者：社会経済史学会中国四国部会

## 2. 1994年度

### 大会報告

1994年度大会は11月5日（土）・6日（日）の両日、岡山大学経済学部を会場に開催され、次の10報告がなされ、活発な討論が展開されました。

〔研究報告〕

《第1日目》

(1) 明治後期における農村社会事業の展開  
—岡山県馬屋上村における藤井静一の活動を中心に—

岡山大学大学院文化科学研究科

赤 松 力

(2) 旧韓末群山地方における経済状況についての一考察

岡山大学大学院文化科学研究科

古 川 昭

(3) 中国・四国地方の軍政とBCOF

呉市史編纂室 千 田 武 志

(4) 地主経営の展開と銀行設立—岡山県浅口郡高戸家の事例—

岡山大学大学院文化科学研究科

森 元 辰 昭

(5) ドイツにおける鉄道建設と経済成長—19世紀のドイツの工業化に果たした鉄道部門の役割について—

広島経済大学経済学部

竹 林 栄 治

(6) 阿波踊りと徳島藩政について

徳島地方史研究会 三好 昭一郎  
《第2日目》

(7) 満蒙開拓青少年義勇軍について—岡山  
県川上町の場合—

清心女子高校 山内 宏之

(8) 近世における製塩業カルテルの成立と  
その展開—『十州休浜同盟』の機能と評  
価について—

松山大学大学院聴講生

熊谷 正文

(9) 陰陽連絡鉄道敷設をめぐる因伯地方の  
動向

岡山近代史研究会 在間 宣久

(10) 近代地方都市の成立—運輸・情報ネッ  
トワークの整備を中心として—

松山大学経済学部 岩橋 勝

### 3. 1994年度

#### 大会記録

報告要旨は省略しますが、以下のような質  
疑応答がなされました。

#### <質疑応答>

1. 赤松 力報告：司会 中山富広

Q：佐藤雄一：日清戦争後の懺悔会は、石井  
十次や救世軍などとの関係や影響はみられな  
いか。A：全くみられないわけではないが、  
山間僻地なのでここまでは響いていない。Q  
：懺悔会とはどんな会か。A：日蓮宗信徒と  
しての活動で、藤井がリーダーとなったのは  
地主であったからで、彼の前で不平・不満を  
打ち明ける方法がとられた。Q：定兼学：馬  
屋上村という山間僻地で、藤井がなぜ受け入  
れられたのか、日蓮宗不受不施派・報徳精神  
の普及度や村会・御津郡会などに特徴があっ  
たのか、さらに笠井知事の政策について。A  
：守屋茂の研究では、不受不施派・報徳精神  
が強調されるが、藤井が村会議員であって公

職についていたこと、在村地主として名望が  
あったこと、日清戦争期の活動で、上からの  
慈恵的な活動であること、日応寺（日蓮宗不  
受不施派）と姻戚関係にある母親が嫁いでき  
ており、家庭のしつけとして藤井を指導して  
いたであろうこと、村会議決書綴をみると、  
村税の増額議論や村道の改修工事などに寄付  
を行っているので、村政をリードしていたこ  
と等が背景となっていた。

2. 古川 昭報告：司会 高橋 衛

Q：千田武志：郡山の朝鮮における経済的地  
位はどうか。また、貿易統計などで全体の工  
業の投資がわかるか否か。A：穀倉地帯であ  
る全羅北道をひかえて米の移出港であったこ  
と、全州に紡績工場があったこと。Q：貝原  
光世：郡山地方や全羅北道における日本人地  
主と朝鮮人地主の割合はいくらほどか。A：  
日本人大地主が進出しているが、土地所有規  
模はせいぜい10%未満である。Q：日本人が  
土地を買い占める条件はどうか。A：資料11  
と40を説明、朝鮮人はきわめて気軽に田畑を  
売買し、文記目録は「牛の小便づけ」と呼ば  
れ、売買証文として二重・三重に使用され、  
日本人はよくだまされた、と答えた。これに  
対し、森元辰昭は、岡山県満韓視察団の派遣  
や、地主個人の調査によって用意周到に準備  
して土地購入を行ったと反論した。

3. 千田武志報告：司会 高橋 衛

最初に「研究史の混乱を正すため」と前置  
きして、司会者の質問があった。それは日本  
の「軍政」をどう理解するか、ということに  
関わっていることで、初期の沖縄は「軍政」  
が敷かれたが、間接統治の中四国でも「軍政  
部」と呼んでいるのはなぜか。軍団と軍は英  
語でどう呼んでいるか、との質問であった。  
A：軍団はGROUPという用語が使用されてい  
るが、軍は再調査し、ここでは保留すること

が、また、軍政はMILITARY GOVERNMENTの訳であるが、日本上陸・進駐までは軍政を敷くかもしれないから、用語としてM.Gを使用した。Q：黒川勝利：軍の中に民間人の比重が多いと言うが、実際はどうか、もし、そうであるなら地方政治に影響を与えたのではないか。A：最初は軍人が多数であったが24年段階では民間人が多くなり、例えば、福祉問題の専門家がおおり、2年間各地を演説してまわり、広島県の福祉に大きく貢献した者などの例があること、占領政策の変化のなかで、占領軍軍政部からの援助・支援があったこと、が報告された。これに関して、司会者からBCOF内にかなりNEW DEALERの影響があったと考えられるとの補足があった。

#### 4. 森元辰昭報告：司会 太田健一

Q：定兼学：中地主研究は、近代日本の発展に中心的な役割を果たしたことを実証しようと思図したものであろうが、名望家や豪農範疇と中地主との相違について説明を求めた。A：名望家という規定はあいまいで、使用者によって異なるので、相違点が難しいこと、豪農とは手作りで、雇農を使つての農業経営者で、中地主は明らかに寄生地主であることその意味で豪農は小地主の場合に考えられること、この他、研究史上では、大地主・中小地主の分類ではなく、在村地主か不在地主かという分類を重視する立場があるが、この分類では高戸家は在村型であるとした。Q：佐藤正志：1900年代にレントナー化したとするが、その背景または条件について、さらにこのレントナー化が中地主一般に普遍化出来るか否か、の質問があった。A：鴨方地域は麦稈真田や素麵などの農村加工業が盛んなこと、自作農・小自作農が多く、農民が一定の強固な農業基盤をもっていること、を条件として土地の異動が少ないことがレントナー

化の背景となっていること、資本主義の展開している所では、中地主のレントナー化が早期に実現していると考えられることとした。もちろん、大地主であっても解体までレントナー化しない東北型地主もあるし、大地主は明治40年代ないし大正10年代にレントナー化が始まるので、これに比べると、早い時期にレントナー化したといえるとした。Q：坂本忠次：レントナー化との関連で高戸家が銀行を設立したが、それは機関銀行としての役割をもったのではないか、との質問があった。この点は、そのようにいえると思われるが、鴨方倉庫銀行自体の分析をしていないので、ここでは回答を保留するとした。

#### 5. 竹林栄治報告：司会 尾川 弘

Q：黒川勝利：理論の問題として、LERDING INDUSTRYは総合的であったが、R. FREMDLINGの説は新しいのか否か、ドイツ国民経済・関税同盟の存在・技術発展などをみると、ドイツの鉄道建設が経済発展に寄与したことは理解できるが、鉄道建設は、例えばイギリスのインドへの鉄道建設のように植民地経済を固定化したように、鉄道建設と経済発展をストレートに結びつけることへの疑問を提起した。A：FREMDLINGの見解は、数量面が全面に出ているので、他の要素をFOLLOWしたい、またR.Fの理論が新しいか否かよくつかめなかつたので、今後の課題としたいと答えた。Q：高橋衛：鉄道業発展の後方連関効果は当然であるが、イギリスが発達のピークなのに、ドイツでなぜ急速に発展できたのか、トーマス法技術の発展との関連如何、さらに、労働生産性も高いが、資本の生産性も高い。これは企業形態に原因があると思われるが、企業形態との関連は如何、との質問があった。Q：佐藤雄一：前方連関効果をどの程度考えているか、との質問に対し、松尾展成氏が、料金の問題で割安になったこと、具体的には

イギリスから船で運ぶより、ベルリンから鉄道で運ぶほうが安価である、との説明があった。Q：松尾展成：この時期をドイツで一括するのは腑に落ちないことで、例えば関税同盟は成立しているが、ドイツといえるか、特定の場所例えば東ドイツか西ドイツかといった地域性が考慮されないと、構造的な把握にならないとの指摘があった。Q：吉崎一弘：石炭生産量の増加を鉄鋼用だけで説明するのは一面的で、石炭化学との関連があったことまた鉄鋼生産量の増加も大砲や軍艦などの武器の製造が関与していたとの指摘があった。A：多くの点で現時点では保留することとし今後研究課題としたい。

#### 6. 三好昭一郎報告：司会 岡 俊二

Q：中山富広：「おどり場」は通りと考えてよいか。A：街頭型の踊りなので、藩としても町の区画内での踊りを許可した、したがって、道路は自由に使用してよかったこと、ただし、寺院の境内は不許可。司会者：高松藩では、武士に対して、商人たちと一緒に踊るなどという布令がだされるが、なぜか。A：古くは鳥取藩で同様の布令が出されているが、治安対策上のことで、喧嘩口論禁止の一環であると説明。Q：岩橋勝：藩は出来れば踊りを止めて欲しいと考えていたが、それを許可したのは巧妙なガス抜きであったのではないか。A：城下全体の治安維持が難しいので、出来れば止めさせたかったが、結果論的にはガス抜きになったと答えた。

このあと、岡山大学経済学部の一室で懇親会が開催された。昨年の松山大会で予告の通り、極めて質素な懇親会であったが、話に花が咲き、終了の時を忘れるが如きであった。

11/6 大会2日目

#### 7. 山内宏之報告：司会 千田武志

Q：岡 俊二：昭和18,19年で高等小学校に対する割当人数が倍増しており、陸軍・海軍・拓務省の三者による奪い合いになったと思われるが、その調整はどのようになされたか  
A：郡レベルでは校長会の中で三者の割当人数の調整が行われている。県レベルは未調査である。Q：高橋衛：この点に関しては三者の奪い合いだったとしたあと、満蒙開拓青少年義勇軍は、ソ連国境付近に配属されたが、軍属とはなっていない。軍事訓練の中味はどうか。また、武装していたかどうか。A：軍事教練が多く、また軽装備（小銃）で武装していた。Q：道重哲男：戦局との関連で満蒙開拓青少年義勇軍の性格が変化した。昭和12年段階と昭和18,19年段階つまり、関東軍が南方移転した後は、義勇軍も軍事力の補完部隊となったこと、また、報告で高等小学校との説明があったが、これは尋常小学校高等科の誤りで、高等科進学率との関係もあるとの指摘があった。

#### 8. 熊谷正文報告：司会 中山富広

まず、司会者が本報告の「試算」については理解できる部分があったとし、新しい方法による研究成果であるとのコメントがあり、質疑に入った。Q：定兼学：塩の生産力は17,18,19世紀で変化は無かったのか。A：生産性の向上にカルテルが寄与しているが、基本的には生産力は変化しなかった。Q：岩橋勝：価格変動とカルテルの関係に関し、従来の研究は封建的規制の観点からの研究であったが、需給関係から見直す視点は面白い。しかし、市場法則で価格変動をみてよいか否か、との質問があった。A：領主側からみると、生活必需品である塩は、領民の生活に影響しやすいので、安定化を計る必要があった、と答えた。Q：富永憲生：カルテルによる塩の生産量の統制がありながら、一方塩田開発は進んでいるがこの矛盾・逆説はなぜ起こった

か。さらに、塩は在庫がきくか否か。A：塩は目減り分20%分が認められており、在庫がきかない商品。統制と開発との矛盾は、スポンサーが幕藩領主であり、財政難打開のために、経済原則に合わない開発を行った。

#### 9. 在間宣久報告：司会 道重哲男

Q：司会者：本報告では、政治家の対抗関係だけでなく、地域の変化の問題が課題として残されたのではないか。岡山と鳥取、広島と島根の関係をみると、地主制との関連があると思う、との前置きから質疑に入った。Q：上田賢一：鉄道建設をめぐる憲政会と立憲政友会との争いがあったが、地域の公共性を主張する立憲政友会に対し、明治期の憲政会系の方針はなにか。A：初期では相違はなかった。日露戦争後の財政問題が起こった時点から主張の差が明確になっていく。Q：神立春樹：明治30年代は日本海側に山陰地方が形成される時期であるが、この時期の全体としてどのような交通ネットワークが構想されていたか。また、伯耆と因幡の違いについてはどうか。A：明治20年代には鳥取・島根の県会で議論しており、合同で運動を展開している。この時点では、松江―鳥取―京都の路線が構想されていた。大正期には江津と広島を結ぶ路線の建設が構想された。：司会者：県会議員が何でメシを食っているか。地主は米、麦、炭、材木を運ぶ鉄道建設に期待したのではないか、この点で特に美作地方＝津山の動きが鳥取との関連を重視したのではないかと指摘があった。A：現段階では調査出来ていないので課題としたい。

#### 10. 岩橋勝報告：司会 坂本忠次

Q：定兼学：松山市が地方都市として明治38年に成立したが、今治や新居浜などとのネットワーク基地として成立したのはいつか。

A：人口を基準として考えている。鉄道網は明治20年代、新聞・雑誌は大正期に発達し近代化は遅かった。明治維新によって体制が変わっても20～30年は変化がなかった。Q：神立春樹：松山の明治初年の人口は幾らか。士族の人口・戸数はいくらか。A：33000～34000人程度。士族は4500戸（士族・卒族を含む）。Q：神立春樹：岡山市と同程度の町であるが、この士族の行方はどうか。岡山では金禄公債を質入・蓄入したり、古物商を開いて売り食いしたり、岡山城の堀の埋め立て工事の土木作業員などになって、士族の解体が進んだ。A：士族授産事業もあったが、多くは東京に出たりして離散した。Q：神立春樹：軽便鉄道方式は独特の形態である。なぜ、この方式になったのか。A：明治20年代民間資本によって敷設されたが、最初の三津線が利益率がよかったことでこの方式で敷設された。Q：司会者：都市化は戦争がその契機となりやすく、日露戦争期や満州事変期に全国的に都市化が進むが、松山は逆になっていないか。A：都市化を考える場合、情報産業の発達が雇用や定住を促進すること、いわば無形の媒介物によって都市化が促進されることがあること。Q：神立春樹：日雇いが多いが日雇いが住める条件があった。東京でも細民が多かった。近代化で細民が減少し、学校ができると寄宿生などが増加して都市らしくなる。：司会：公衆衛生の発達、ことにペスト対策が進んでいく問題があるが、時間の都合で以上で終る。

以上、2日間の発表・討議がおわり、事務局長中山富広氏の閉会の言葉、新代表理事神立春樹氏の挨拶で大会は終了した。今回は、山形で、11月の第1土・日に開催される予定  
(敬称略、記録 森元辰昭)

